

学習者の視点を文法記述に取り入れるための 方法論の検討

植松 容子

1. はじめに

近年、日本語教育文法の研究がさかんになってきており、大規模コーパスを用いた初級文法項目の見直しが行われている。見直しの内容は、「教科書に提示されている用例と実際の使い方の乖離」や「特定の文法項目と結び付きやすい語彙」、「初級で学習してもなかなか使えるようにならない（使わない）形式の特定」、「教科書ではあまり扱われないが、意外と初級で有用な表現」などがあり、これらの見直しが教育現場にとって有益な情報となると考えられる。一方で日本語教育文法の記述という側面に目を向けてみると、その研究はあまりさかんに行われていない。日本語教育文法研究の進展のためには、項目の選定だけにとどまらず、記述内容の見直しもすすめていく必要があるのではないだろうか。本稿は、教育現場に資する記述を提供するための基礎的な調査として、作文調査に加えてインタビュー調査を行うことの有効性を検討する。

2. 日本語教育文法研究の現状と問題意識

まずは日本語教育文法研究の流れを整理しておきたい。2000年以降、さかんになってきている日本語教育文法の研究であるが、それらはどれも日本語学の成果をそのまま日本語教育に生かしたのではうまくいかないという問題意識から出発している。

たとえば、「話す」「聞く」「読む」「書く」の4技能別に、コミュニケーションに必要なかどうかという観点から文法を考えることの必要性を主張したもの（野田 2005）、現在の機能シラバスは真の機能シラバスとは言い難いことを指摘し、コーパス調査の手法で実際の母語話者の使用と現在の機能シラバスの内容との間にはギャップがあることを明らかにしたもの（小林 2002, 小林 2005, 小林 2009）、話す教育は、学習者にとっての必要な場面を考えてタスクを与え、その際に必要になる文法を指導するという方法で行われるべきであることを主張したもの（山内 2005a, 山内 2009）、中級学習者が使用できていないものは初級で教える必要はないことを指摘し、学習者の発話コーパス（KY コーパス¹）と『みんなの日本語』の文法項目を比較したもの（山内 2005b）などがある。これらに共通しているのは日本語学の成果をいったん解体して再構築することが必要だという考え方であり、そのうち小林氏、山内氏はそのための方法論を具体的に示している。一方で日本語学の成果を生かすことができるという立場もあり、たとえば庵（2010）では既に発見されている文法現象をデータを用いて再検討し、日本語教育に具体的に役に立つ形で精錬することも日本語記述文法の一つであり日本語教育文法と同義と考えると述べている。

1 KY コーパスとは 90 人分（英語母語話者、韓国語母語話者、中国語母語話者各 30 人）の OPI（Oral Proficiency Interview）のインタビューを文字化した言語資料である。

また、このような考え方に異議を唱えるものも見られる（菊地ほか 2005, 菊地・増田 2009）。日本語教育文法を単なる「教室内での教えやすさ（習得しやすさ）」を基に考えるのではなく、「学習の実文脈への転移可能性（＝学習者が実文脈と向き合った際、利用可能な知識や技能が過去の学習から「検索・応用」できるか）（菊地ほか 2005: 290）」を追究するべきであり、長い目で見て本当に学習者にとって必要な文法を慎重に検討しなければならないと主張している。

以上のように日本語教育文法の研究はさかんに行われており、いくつかの立場が出現して議論と呼べるものも生じている。しかし具体的な方法論を示したものの多くが量的データにもとづいた初級文法項目の見直しという方向にすすんでいる。もちろん初級項目の見直しは今後の日本語教育の発展の鍵とも言える重要な作業であるが、一方で個々の文法項目の記述内容については問題ないのだろうか。

記述の問題点を指摘したものには白川（2002）、白川（2005）、白川（2007）などがある。白川氏は、これまでの文法研究は「母語話者の視点」から記述されたものであり、「学習者の視点」から発想した文法にするべきであることを述べた上で、日本語を母語としない人達に説明するための文法を「語学的研究」と呼び、誤用・非用分析、対照分析、教科書分析などの様々な方法を組み合わせて日本語学習者の「勘どころ」を的確に捉えた記述を行うことの必要性を主張している。このように記述についても見直されるべきであるということが指摘されているが、大規模コーパスが整ってきているという背景もあるのか、量的データを用いた文法項目の見直しは行われている一方で、記述内容の見直しについてはまだすすんでいない。

そこで本稿では、学習者の隠れたつまづきを探り出して学習者にとって本当に必要な情報を記述として還元するための基礎的研究の第一歩として、学習者への作文調査に加えてインタビュー調査を行うことを試みる。

3. 調査について

3.1 調査の概要

調査は2011年6月から7月にかけて、昭和女子大学に在籍する留学生3名を対象に行った。学習者の母語は、中国語1名、韓国語2名（内1名は中国の朝鮮族）である。調査対象者の人数は、基礎研究として1人1人の学習者の日本語をじっくりと観察することが必要であると考えたため、3名とした。なお、この3名は本稿においてはAさん、Bさん、Cさんと呼ぶことにする。また、調査対象者の母語については、日本における日本語学習者数が圧倒的に多い中国語母語話者と韓国語母語話者を対象とすることが喫緊の課題と考えられるため、この2つの母語話者を対象とした²。被調査者の情報を表1に示す。

表1 調査対象者

	母語	学習期間	JLPT ³	初級の時に使用した教科書
Aさん	中国語	1年	なし	『みんなの日本語 初級Ⅰ 本冊』 『みんなの日本語 初級Ⅱ 本冊』
Bさん	韓国語／中国語	1年7カ月	2級（2010年）	
Cさん	韓国語	3年1カ月	1級（2010年）	

2 文化庁の調査によると、平成22年度11月1日現在の日本国内の日本語学習者数（国別）は1位が中国で83,934人、2位が韓国で17,094人となっている。

3 JLPTとはJapanese-Language Proficiency Testの略で、日本語能力試験のことを指す。

3.2 調査の方法

調査は作文調査とインタビュー調査の2種類を行った。まず作文を書いてもらい、その作文に調査者（筆者）が目を通して気づいた部分をピックアップし、その点について後日被調査者にインタビューするという方法で行った。以降、作文調査を【調査1】、インタビュー調査を【調査2】とする。

【調査1】では、4種類の作文タスクを課した。設定は、「奨学金申請のための面談をメールで担任教員に依頼する（以下「作文タスクa）」、「理由があって長期間欠席しなければならないことをメールで担任教員に連絡する（以下「作文タスクb）」、「スピーチで特定の人物（家族・友達・尊敬する人など）を紹介することになったので、そのスピーチ原稿を書く（以下「作文タスクc）」、「ブログに「私の失敗」というタイトルでエッセイを書くことになったので、その原稿を書く（以下「作文タスクd）」の4題とした。なお、作文タスクbの「欠席の連絡」は状況設定をはっきりさせるために、前日に医者に行った際に下記の会話が交わされたと設定し、調査用紙に示した。

昨日、病院へ行きました。
 医者「インフルエンザですね。」
 あなた「そうですか…。」
 医者「薬、5日分出しておきますね。5日後にまた来てください。」
 あなた「あう、大学は…」
 医者「うーん、完全に治るまでは外出しないほうがいいでしょうね。」

なお、これら4つのタスクは、特定の形式について観察するという目的で設定したものではない。まず全体的な観察を行って個人が抱えている問題を発見し、今後量的調査を行うための仮説を探ることが目的である。そのため、似たようなタスクにならないように、「働きかけの有無」、「読み手のタイプ」について考慮した上でタスクを設定した。各作文タスクの特徴を整理したものを表2に示す。

表2 作文タスクの特徴

タスクの種類	作文タスクの特徴		読み手
(a) 奨学金申請のための面談	働きかけ 有	丁寧に依頼する	特定の相手 (担任教員)
(b) 長期欠席の連絡		丁寧に事実を伝えて欠席を願い出る	
(c) 人物紹介のスピーチ原稿	働きかけ 無	特定の人物について特徴を描写する	不特定多数
(d) ブログにエッセイを書く		自分の経験について語る	

【調査2】は、【調査1】が終了してから1週間から10日後に行い、この間に筆者が作文全てに目を通し、「誤用」「非用」「正用」に注目してインタビュー項目を選定した⁴。そのため、インタビューの項目は被調査者によって異なる。

【調査2】当日は選定した項目をリストアップしたものにしたがい、当該文法項目について説明を求めたり、類似表現がある場合にはもう一方を使うとどのような感じがするかなどについてインタビューを行った。インタビュー時間は30分程度であった。

4 正用とは適切な使用、誤用とは不適切な使用、非用とは「(無意識的に)使っていないこと、(意識的に)使おうとしない(避けている)こと」とする。

4. 結 果

4.1 Aさん

【調査1】は2011年6月13日(月)に、【調査2】は2011年6月20日(月)に行った。Aさんの作文を観察して選定したインタビュー項目は合計5点で、内誤用(および非用)が2点、正用が3点であった。

インタビュー項目

- ①理由表現は「から」しか使っていない(「から」の誤用,「ので」の非用)
- ②「てしまう」の使用が不適切(「てしまう」の誤用)
- ③「ている」の使用が適切(「ている」の正用)
- ④「という」の使用が適切(「という」の正用)
- ⑤条件表現が適切に使い分けられている(条件表現の正用)

ここでは、①の誤用(非用)に注目してみると、Aさんは作文中の理由表現全てに「から」を用いており、「ので」や「ため」などの使用は全く見られなかった。

- (1) 私は金曜日に全部授業が入っていますから⁵、私の授業がない日期に変わっていただきませんか？
(タスク a)
- (2) 最近、体調が悪くなりましたから、病院へ検査しました。(タスク b)
- (3) 母はいつも小さい動物でも命があるから大切にしなければなりませんと言っています。(タスク c)
- (4) 中学校で、基礎をきちんと勉強しなかったから、高校で勉強は難しくなった。(タスク d)

もちろん、これら全てが不適切というわけではない。たとえば(3)は「から」で適切であると考えられる。しかし、ここで注目すべき点は理由表現が正用か誤用かということではなく、理由表現に「から」しか用いていないということである。

この点についてAさんにインタビューを行ったところ、理由表現としては「から」のほかに「ため」も知っているが、「ため」の使い方がよく分からないために使用していないこと、また「ので」は話し言葉で使われると思っていたため使わなかったということであった。インタビューの様子を以下に示す⁶。

(5) U: 「から」ってどんな時に使いますか？

A: 理由…

U: 今まで勉強した理由の表現、「から」の他に何か知っていますか？

A: 「ため」……(数秒)……わかりません。

U: じゃあ、ここではどうして「ため」じゃなくて「から」を選んだんでしょうかね。

A: 本当に「から」と「ため」の使い方は…「ため」が分からない時はずっと「から」を使っていたから…慣れてきたんです…。

U: あー、慣れてきたんですね。

5 下線は筆者による。以下同様。

6 Uは筆者である。以下同様。

A: はい。

U: もうひとつ、「ので」っていう表現もありますよね。「ので」はあまり使わないですか？

A: そうですね。

U: それは何か理由がありますか。

A: 「ので」はちょっと話し言葉と思って…。

U: あー、「ので」は話し言葉だから…

A: はい。

「ので」は話し言葉である」という理解は一見誤解であるかのように見えるが、実はこのように考えてしまうのも仕方がないと納得できる部分もある。その理由としては、丁寧な発話においては、日常生活でも「から」よりも「ので」のほうがよく使われているということが考えられる⁷。Aさんは「話す時の理由表現では「ので」がよく使われている」ということを感じ取り、「話す時に「ので」を使うのなら、書く時は「から」であろう」という独自のルールを作ってしまったのではないだろうか。

4.2 Bさん

【調査1】は2011年6月13日(月)に、【調査2】は2011年6月20日(月)に行った。Bさんの作文を観察して選定したインタビュー項目は合計4点で、内誤用(および非用)が3点、正用が1点であった。以下に概略を示す。ここでは①の「し」の誤用と④の「ので」の正用に注目してみたい。

インタビュー項目

- ①「～し」の使用が不適切(「～し」の誤用)
- ②「させていただく」を使わない(「させていただく」の非用)
- ③「てしまう」を使わない(「てしまう」の非用)
- ④理由表現が全て「ので」で適切(「ので」の正用)

まず①の「し」の誤用を見てみよう。自分の好きな歌手について述べているところで、次のように使われている。

- (6) メンバーの中で一番背が高いし、声も一番高いし、一番はずかしいがれで勉強も一番よくできます。(タスクc)

この「し」の使用に違和感を感じたためインタビューで聞いてみたところ、「し」を並列の「と」と同じように使っているという回答が得られた。

- (7) U: 「一番背が高いし、声も一番高いし」と「し」あるんですけど、どうして「し」使ったんですかね。
B: んー…「と」と同じ。
U: 「と」ってどの「と」?
B: 「～や～や」。

7 詳細は歌(2011)を参照されたい。

U: あー、「や～や」と同じ。じゃあこもし「一番背も高くて声も高くて」だとどんな感じですか？

B: あー、大丈夫です。

U: 私、ここ「し」だとおかしい感じがして…

B: あ、おかしいですか。

庵ほか (2000: 198) において、「し」は「[PしQ]は複数のことがらを並列的に述べる表現です」と説明されている。しかし、これでは「と」との使い分けはよく分からない。「と」は「(名詞)と(名詞)」の場合に使うが、形容詞の並列の場合は「し」を使うということを意識しているのかもしれない。また、市川 (2005: 387) では「並列「～て」が網羅的に物事を羅列するのに対し、「～し」は話し手が考えながら、一つずつ列挙していく傾向がある」と書かれているが、「～て」の「網羅的に物事を羅列する」という説明は抽象的であり、学習者にとって分かりやすいものとは言えない。Bさんは「～くて～くて」を使っても問題ないことは理解できているということから、もう一つの可能性として、「て」には様々な用法があるため、より並列であるということが分かりやすい「し」を使ったと考えることもできる。

次に④の「ので」の正用についてであるが、Aさんは理由表現に「から」しか使っていなかったのに対し、Bさんは「ので」を使用していた。

(8) 医者さんからインフルエンザなので完全に治るまで外出しないほうがいいと言われました。

(タスク b)

Bさんは4タスク全体で理由表現を1例しか使用していなかったのであるが、(8)の例についてインタビューで聞いてみると、「から」は話し言葉のように感じるから書く時には「ので」を使っているという回答が得られた。

(9) U: Bさんは「ので」をよく使ってるんですね。

B: はい。

U: 原因理由を表す表現で「ので」のほかにどんなものを知っていますか？

B: 「て」、「なので」、「で」、「に」？「に」、ないか。「ので」が一番よく使います。

U: 「から」ってありますよね。Bさん全然「から」を使っていないんですよ。

B: はい。

U: すごく自然なんですね、「ので」で。留学生は「から」をたくさん使ってしまうことがあるんですね。Bさんは「から」と「ので」をどうやって区別していますか？

B: 「から」はなんか話し言葉みたいだから。

U: 「から」あまり使わない？

B: はい。なんでかは分かりません。

U: 先生に「「から」使ったらだめだよ」と言われた…？

B: いえ…自然に。

U: もうひとつ原因理由の表現で「ため」っていうのを知っていますか？

B: 習いましたけどあまり使わないです。

(5) で見た A さんに対するインタビューでも「話し言葉／書き言葉」という観点から「ので」と「から」を使い分けているということであったが、A さんは「「ので」が話し言葉である」と捉えたために「から」の不自然な使用に至ったのに対し、B さんは「「から」が話し言葉である」と捉えたために「ので」の自然な使用に至っている。野田 (2001: 104) では「使えるかどうかは、対立を習得しているかどうかにかかっている」と述べられているが、どの項目を、どんな条件の下で対立と捉えているかには、個人差があるようである。

4.3 C さん

【調査 1】は 2011 年 6 月 15 日 (水) に、【調査 2】は 2011 年 6 月 23 日 (木) に行った。C さんの作文を観察して選定したインタビュー項目は合計 5 点で、内誤用 (および非用) が 4 点、正用が 1 点であった。以下に概略を示す。ここでは②の「ようになる」の誤用と④の「つもり」の誤用に注目してみたい。

インタビュー項目

- ①「ている」の不自然な使用 (「ている」の誤用)
- ②「ようになる」の不適切な使用 (「ようになる」の誤用)
- ③「させていただく」を使わない (「させていただく」の非用)
- ④「つもり」の不適切な使用 (「つもり」の誤用)
- ⑤理由表現の使い分けが自然 (「ので」「から」の正用)

まず、②の「ようになる」の不自然な使用であるが、たとえば以下のような例が見られた。

- (10) 8 カ月立ち、結局店を閉めるようになりましたが、自分にとってはいい思い出もあり、
(タスク d)

ここでは、自分の店を開いたがうまくいかずに閉店することになったということを書いている。この下線部「ようになり

- (11) U: 「結局店を閉めるようになり
- C: 「閉めることに
- U: 強いイメージ?
- C: うん、なんか、自分の意思で閉めることにしたっていう、それよりも予想なことが入ってきて、仕方がなく閉める方法しかなかったという意味かな、うん。
- U: 自分ではコントロールできない、仕方のない状況。
- C: うん。

興味深いのは、C さんの 1 つ目の発話にある「閉めることに

「ようになる」と「ことにする」を対立として捉えている可能性が考えられる。

また、「ようになる」を学習したかどうかを確認するために、一般的に初級で学習する「ようになる」の例をあげたところ、学習したことは思い出したようであった。

(12) U: 「ようになりました」って、『みんなの日本語』にも出てくるんですけど、実はこういう使い方じゃなくて、「日本に来てから料理を作るようになりました」とか

C: あーあーあー

U: 習慣が変わった、っていうほうなんですね。

C: うんうん。

U: 「ようになりました」っていうのが変化であるとは捉えにくいということですか。

C: 韓国の言葉遣いだと、同じ意味になるんですね。

初級の時に『みんなの日本語』で学習済みではあるようだが、その意味や使う状況についてはあまり印象に残っていないようである。

次に④の「つもり」の不自然な使用について見てみよう。

(13) 私もはやく逢いたくて夏休みに会に行くつもりです。(タスク c)

これは、人を紹介するというタスクで甥っ子を紹介しており、作文の最後の一文で国にいる甥っ子に早く会いたいということを書いたものである。(13)における「つもり」が誤用とは言い切れないが、違和感がある。そこでこの点についてインタビューを行ったところ、次のような回答が得られた。

(14) U: 「会いにいくつもりです」ってありますよね。ここは、ほかの表現とは別に迷わなかった？
すぐに「つもり」がいいと思って…

C: はい。

U: 「会いに行こうと思っている」と「会いに行くつもり」の、Cさんの中での違いみたいなのはありますか？

C: えーと、なんか、自分の中の表現なんですけど、「思っている」ってことは変更があるかもしれないけど、「つもり」っていうことは絶対行くってこと、変更がない、何があっても行くっていう。

以上のことからCさんは「つもり」と「～ようと思っている」の違いを、「変更の可能性があるかどうか」で使い分けしているということが分かる。「つもり」については、庵ほか(2000: 137)では「事前に決意し固まっている意志を表します」と、市川(2010: 387)でも「事前に決意し、固まっている意志を表す」と書かれている。確かに「ようと思う」や「たいと思う」との違いという観点から考えた場合にはこのような説明で十分であるかもしれないが、実際に使用する場合には、その観点からのみの説明では解決できない問題があるようである。

5. 考 察

以上の結果から、日本語教育文法の記述的研究を行うための方法の一つとして、作文調査に加えてインタビュー調査を行うことの有効性が示唆される。学習者の使用状況を調査することだけを目的と

した場合には、作文や学習者コーパスに反映された文字情報を拾っていくだけでも得られることがある。しかし、その誤用（非用）の原因を探って問題解決のために記述することを目的とした場合は、作文で産出されたものにもとづいてインタビュー調査を行うことで、誤用（非用）の原因解明にせまるための手がかりが得られると言える。

文法記述を目的とした場合に、作文調査に加えてインタビュー調査を行うことの利点は次の3点にまとめられる。

1点目は、対立する項目（例「から」と「ので」）がある場合に、どちらの項目をどのように捉えて誤用に（正用に）至ったかを把握しやすいということである。(5), (9) で見たように「から」と「ので」は「話し言葉か書き言葉か」で使い分けしているという共通点が見られたが、Aさんは「ので」を話し言葉と、Bさんは「から」を話し言葉と捉えていた。なぜ一方を話し言葉と捉えてしまっているのか、その原因解明にまでせまることはできなかったが、どちらを話し言葉と捉えるかには個人差があり、その原因には学習環境などの複雑な要因がからみあっていることが分かる。

2点目は、特定の文法項目の使い方が不自然であっても、当該文法項目について持っている知識は間違っていないことが確認できるということである。たとえば(13) で見た「つもり」の使い方は不自然ではあったが、インタビューを行ってみると「つもり」の（現時点で明らかにされている）使い方の知識はあるということが分かる（=(14)）。(13) は「つもり」の文法説明と照合した場合には特に問題はなく、なぜこの場合は不自然なのかが説明できない。つまり、現在の記述内容が間違っているというわけではないが、非母語話者が運用することを考えた場合にはまだ不足している観点があるということになる。

3点目は、誤用をひきおこす原因が意外なところにあり、記述のためのヒントを教えてくれるということである。(11) の「ようになる」の誤用を母語話者が見た場合、単に「ように」と「ことに」を間違えただけと考えがちであるが、インタビューによって「ようになる」と「ことにする」を対立として捉えているかもしれないという可能性が見えてきた。「ようになる」という変化の表現には、母語話者が想像しにくいような難しさがああり、誤用や非用を未然に防ぐためにはまだ記述すべきポイントが残されているということが示唆される。

ただし、当然のことではあるが、インタビューを行っても分からないこともある。たとえば、Cさんは理由表現として「から」と「ので」を両方用いており、それがどちらも適切に使い分けられていた。しかしその点についてインタビューしたところ、「何となく使っているので説明できません」という答えであった。習得研究においても、学習者が作り上げる中間言語は無意識的なもののほうが多いという指摘があるため（大関 2010）、説明できないことがあるというのは自然なことである。しかし、だからといってインタビューで内省を話させることは無意味だということにはならない。作文調査に加えてインタビュー調査を行うことにより、産出されたものだけを見ていた場合には推測するしかなかった学習者独自の文法の整理の解明に、一歩せまることができると言えよう。

6. おわりに

今回の調査で、文法記述を目的とした場合、作文調査にインタビュー調査を組み合わせることで誤用（非用）の原因を探るための手がかりが得られる可能性が示唆された。しかしインタビュー調査をもってもお分からないこともある。今後は、ひきつづき同じ3名を対象に調査を継続して問題点を

拾い上げていくとともに、インタビュー調査以外の可能性についても検討していきたい。

謝 辞

本調査にご協力いただいた昭和女子大学の留学生3名に感謝申し上げます。

引用文献一覧

- 庵功雄ほか（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 庵功雄（2010）「日本語教育文法研究のための多様なアプローチ」『日本語文法学会第11回大会予稿集』pp. 41-42
- 市川保子（2005）『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク
- 市川保子編（2010）『日本語誤用辞典 外国人学習者の誤用から学ぶ日本語の意味用法と指導のポイント』スリーエーネットワーク
- 大関浩美（2010）『日本語を教えるための第二言語習得論入門』くろしお出版
- 菊地康人ほか（2005）「現場から発信する「もうひとつの日本語教育文法」—日本語教師だからこそ見えること・できること—」『2005年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp. 283-294
- 菊地康人・増田真理子（2009）「初級文法教育の現状と課題—「です・ます完全文」をテンプレートとする教育からの転換を—」『日本語学』Vol. 28-11 明治書院 pp. 64-74
- 耿梅晶（2011）「中国語を母語とする日本語話者による「から」「ので」の使用状況の考察—日本語母語話者との比較を通して」『日本語／日本語教育研究』第2号 pp. 85-97
- 小林ミナ（2002）「日本語教育における教育文法」『日本語文法』2巻1号 pp. 153-170
- 小林ミナ（2005）「コミュニケーションに役立つ日本語教育文法」野田尚史編『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版 pp. 23-41
- 小林ミナ（2009）「コーパスと日本語教育—使用実態から初級文法シラバスを見直す」『国文学 解釈と鑑賞』74（1）pp. 84-94
- 白川博之（2002）「記述的研究と日本語教育—「語学的研究」の必要性と可能性—」『日本語文法』2巻2号 pp. 62-80
- 白川博之（2005）「日本語学的文法から独立した日本語教育文法」野田尚史編『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版 pp. 43-62
- 白川博之（2007）「学習者の誤用・非用をどう考えるか」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部 第56号 pp. 173-179
- 野田尚史（2001）「文法項目の難易度—難しい文法項目は複雑な処理を要求される」野田尚史ほか『日本語学習者の文法習得』第6章 大修館書店 pp. 101-120
- 野田尚史（2005）「コミュニケーションのための日本語教育の設計図」野田尚史編『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版 pp. 1-20
- 山内博之（2005a）「話すための日本語教育文法」野田尚史編『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版 pp. 147-165
- 山内博之（2005b）「日本語教育における初級文法シラバスに関する一考察」『実践国文学』第67号 pp. 左1-11
- 山内博之（2009）『プロフィジェンシーから見た日本語教育文法』ひつじ書房

参 考

文化庁ホームページ：国内の日本語教育の概要（アクセス日時：2011年10月17日（月）15:00）

http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/jittaichousa/h22/gaikoku_6_06.html

（うえまつ ようこ 日本語日本文学科）